

加藤登紀子さんに聞く



かとう ときこ
1943年、中国東北部ハルビン市に生まれる
65年、第2回日本アマチュアシャンソンコンクールで優勝し、歌手デビュー
翌年に「赤い風船」で日本レコード大賞新人賞、69年に「ひとり寝の子守唄」で
71年に「知床旅情」で日本レコード大賞歌唱賞を受賞
「愛のくらし」「百万本のバラ」「時には昔の話を」「難破船」などヒット曲多数
2000年から2011年には環境省・UNEP（国連環境計画）親善大使に就任
アジア各地を訪れ、自らの目で見た自然環境の現状を広く伝え
音楽を通じた交流を重ねた
国内外で精力的にコンサートを行い、世代やジャンルを超え、観客を魅了し続ける
恒例の「ほろ酔いコンサート」は今年で開始から50年となる
『青い月のバラード』『運命の歌のジグソーパズル』
『哲さんの声が聞こえる—中村哲医師がみたアフガンの光』など著書も多数ある

私は、
私を生きたるために歌う

「時には昔の話を」二〇二二

聞き手

菅間正道（自由の森学園高校・校長）

●戦争を単純化しない

菅間 およそひと月前の六月一八日の東京・渋谷オーチャードホールでの「エターナルコンサート2022」時を超えるもの、素晴らしかったです。昨年も同じホールで加藤さんの「コンサート2021 時には昔の話を」を聴かせていただいたのですが、感想を一言でいうと、まさに圧巻、圧倒的な迫力のステージでした。去年はこの百年を歌で振り返るという歴史的趣向でしたし、今年は、「知床旅情」、「リリー・マルレーン」、そして「イマジン」などの楽曲とそこに添えられるMCなど全てが溶け合って、歌と社会、歌と世界が寄り添っているという感じを強く持ちました。新曲「声をあげて泣いていいですか」もすごく良くて、慟哭と鎮魂相半ばするこの世界と時代の中で、色々うちひしがれている人に届く、響く歌でした。

加藤 ああ、そう…！ 菅間さん、来てくださったんですね。私は、誰かのためというより、いつも自分が生きるために歌っていると思うんです。新曲を作ったのは、

昨年の夏でウクライナ戦争の前だったけれど、本当泣きたいことが、悲しいことがこんなに次から次へとあるのかって感じでした。

菅間 今日は、ご多忙の中、お時間を取っていただき大変嬉しいです。じつは、加藤さんは、自由の森学園と色々縁があると私は思っています——私の本『向かい風が吹いていても』の担当編集者・鈴木庸さんが、加藤さんの最新著作『哲さんの声が聞こえる』の編集も担当されており、私と加藤さんをつないでくださったのですが——一つは、アースデーで、自由の森学園の高校生たちとコラボ合唱をしてくださったこと。それと、自由の森学園は生徒合唱が大切な学校文化なのですが、およそ二〇年前から「時には昔の話を」が合唱曲になっていることなどです。

まずはじめに、ロシアのウクライナ侵攻戦争についてお伺いします。加藤さんは、この間様々なメディアで発言なさっていますが、印象に残っているものの一つが、「人と国を一体化させて、憎しみを増幅させることがないように」(NHK NEWS おはよう日本)二〇二二年四月四日)というものでした。これは、まさに国家間戦争という視点に対して、「国際」ではなく、市民交流・支